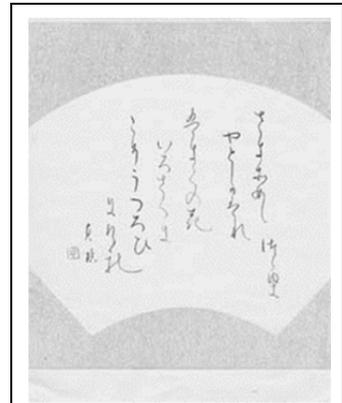


鎌倉時代初期の『建礼門院右京太夫集（けんれいもんいんうきょうのだいぶしゅう）』（新潮日本古典集成）は、平清盛の娘中宮徳子（院号は建礼門院）に仕えた建礼門院右京太夫と称されている女性の歌集です。平家の栄華と没落を背景に、徳子の甥の公達平資盛（すけもり）との恋と死別が歌われています。資盛は 25 歳で壇ノ浦で入水、女性が 30 歳を過ぎた頃です。それから 50 年ほど後、約 360 首の歌と背景を綴る詞書からなるこの歌集は、老女となった右京太夫自身の手でまとめられ、一種の回想・日記文学ともなっています。

この歌集には一読して忘れられない、「文字と文学」という私の関心にとって重要な一節があります。かの女性は、大切に保管していた二人の間で交わした歌や手紙を漉き直させ、その料紙のうえに亡き資盛の供養のため仏画を描き、経を写します。漉き直した料紙故に、もとの手紙に綴られていた文字が所々に残されていて、不意に現れた恋人の筆跡に気付いて驚き、経文を綴りながら、「これは私が書いたあの手紙への御返事でしたわ」などと、昔のことを思い出します。さらに『源氏物語』にも同じような場面があったことをふと思い出して、心のなかで現実と物語とが交錯することに心乱れます。（第 227、228 歌詞書）

文字は人間の心や精神を宿しています。まとまった文章や著作物でなくても、漉き直した料紙に残された 1 文字あるいは文字の断片の一つの線が、例え文脈から切り離されていたとしても全てを甦らせる魔力を宿している場合だってあるのです。なるほど文字によって物語が綴られ読まれるのは当然ですが、それとは別の次元で、「文字」という存在は物語と深く関わりを持っています。残り 3 回の連載で、私が今までに扱ってきた「文字と文学」に関しての研究を紹介いたします。次回は「文字を書き写すことの物語 —E・T・A・ホフマン『黄金の壺』—」、第 3 回は「紙のうえに綴られる文字の物語 —フランツ・カフカ『最初の悩み』と E・A・ポオ『アーサー・ゴードン・ピムの物語』—」、第 4 回は「文字の削除と書き込みの物語 —K・チャペック『ロボット』—」です。文字のなかからどのような物語が現れるのか、お楽しみ下さい。また読者のみなさんも作品を一読して、私のような読み方が可能なのかどうか、ご確認ください。



美しいかなで書写された歌（古今和歌集 280）